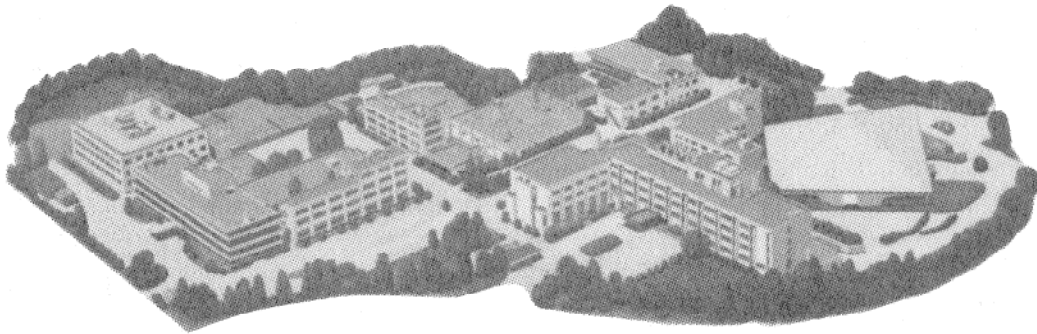




松下技研株式会社

—松下グループの首都圏に於ける研究拠点—

佐野令而*



松下電器産業(株)東京研究所からスタートして今年で丁度30年になる。この間社名は、(株)松下電器東京研究所をへて現在に至っているが、英語名は一貫してMatsushita Research Institute Tokyo, Inc. を踏襲している。独立会社の形体を採っているのは、研究所の特殊性を反映した運営を行うためである。社長は、松下電器産業本社の技術役員のトップが兼務する習わしであり、現在は専務水野博之がその任に就いている。

(所在地) 川崎市多摩区東三田3丁目1番地10号

新宿から小田急線の急行に乗り5つ目の停車駅、向が丘遊園前下車バス10分、又は東名高速道路川崎インターチェンジで下り車で5分、の地にある。多摩川から箱根にいたるなだらかな丘陵地帯の最東端に位置しており、晴れた日には屋上から頭を360度回転させれば、新宿副都心ビル群・日光男体山・富士山・川崎駅前ビル群を望むことができる。

霞が関の官庁街には、地下鉄千代田線を利用して40分で到着する。

(御近所) 川崎国際カントリークラブと道路を隔てて隣接しており、研究室の窓から目にも鮮やかなグリーンを楽しめる(プレーを楽しむ研究者も偶にはいる)。

専修大学とは同じ尾根にある。明治大学工学部・聖マリアンナ医科大学・日本合成ゴム研究所は対面する丘に在る。東京都と川崎市のそれぞれ広大な浄水場が南西方向に隣接していて、この辺り一帯が自然と環境の保護地区となっている。野鳥も多い。

作家の庄野潤三氏は西の丘の上に住み、「夕べの雲」とそれ以降の傑作を書いている。この起伏の大きい尾根伝いに氏が散歩をしているのを、幾度となく見かけたものである。

(構内) 17,000坪の構内には3つの研究機関がある

- | | |
|----------------------------------|------|
| (1) 松下技研株式会社 | 200名 |
| (2) 松下電器産業(株)情報通信研究センター情報通信東京研究所 | 130名 |
| (3) 松下電子工業(株)東京研究所 | 100名 |

(2)は松下技研のコンピュータと通信部門を分離発展させたものであり、(3)は同じく松下技研のシリコン半導体部門を分離し、松下グループの半導体生産担当である松下電子工業の所轄の研究機関として、発展したものである。

3つの研究機関は、根は一つである。コンピュータ・通信・半導体はこれからの産業を支える最重要技術であり、従って最重要研究課題でもある。3つの研究機関は意識のうえで一体感を持つのが望ましく、事実研究者の交流は盛んである。

—昨年、この地をテッキービルズ(Techie

*佐野令而 (Reiji SANŌ), 松下技研株式会社, 取締役, 理学博士, 光学レーザ

Hills)と呼んでいる。ハイテク技術者集団の丘と自負しているわけである。この丘の上に、大阪の本社研究所群のほぼ4分の1相当の研究者が結集していることになる。

構内には、野球場とテニスコート3面がある。またピラミッド形をした大きな体育館があり、地域のママさんバレーや中高生の体育活動に開放されている。

(研究分野) 松下技研の研究分野と具体的技術は以下である

知覚情報処理 (音声翻訳, カラー画像処理, 画像伝送, ニューロネットワーク)
 光情報処理 (3次元計測, 赤外計測, 光学部品, ホログラム)
 新素材 (超機能材料及びデバイス, 分子計測走査型トンネル顕微鏡)
 メディカルエレクトロニクス (超音波診断装置, 超音波体内温度計測)
 超精密加工 (軟X線リソグラフィ用アライナ装置, 超微細加工)
 光エレクトロニクス (エキシマレーザ, 半導体レーザ, 光論理演算素子, 化合物半導体結晶育成)

所謂「非家電」エレクトロニクス分野を担当しているが、近年家電そのものが急速に変化しており、当社での研究テーマ全てが、究極にニュー家電に結実するものである。

(国家プロジェクト) 首都圏の研究所として国家プロジェクトに積極的に参加している。

通産省 大型プロジェクト

- (1) 極限作業ロボット
- (2) 超先端加工システム

医療福祉研究所組合 [がん治療用ハイパーサーミア] 等7件

科学技術庁 創造科学制度 [量子複合材料]

環境庁 [オゾン層等観測研究用センサ] が現在受託しているテーマである。

(研究運営) 官公庁、松下電器本社機構、松下電器グループ内各事業部からの委託研究とそれに対する委託研究開発費によって経営することが基本である。委託研究テーマは、松下技研からの提案によるものと、依頼主からの依頼テーマとがある。

国家プロジェクトは7~8年の長期にわたるものがあり、一般的には基礎的技術開発に適している。事業部委託テーマは当然のことながら短期的に成果が出て事業部経営に貢献することを期待されるものが多い。本社機構からのテーマは、新事業を興すチャレンジングなものが主体である。このほかに依頼主を定めていない自主研究テーマがある。スポンサーに提案するテーマの種は、自力で作らなければならない。グループ内の他の研究所と共同で、自主研究テーマを組むこともある。

テーマに応じてプロジェクトを編成する。プロジェクトリーダー (PL) のもとに人・物・金のいわゆる会社の経営源資を預け、日常の運営権限をPLに委譲している。

同じプロジェクト間の技術と人の交流を積極的に行うため、技術分野毎にプロジェクトを束ねてプロジェクトチームを構成し、各チームにそれぞれチームリーダー (PGL) を置いている。大幅な権限を与えられた一人のPGLが、部隊を率いた数人のPLとともにその方面で前線を築き、「研究戦線異常なし (又はあり)」と頑張っている。

委託研究を基本とするプロジェクト群よりなる運営。

簡単に言えばこのようになろう。

(イベント) 松下グループの統一コンセプトは「ヒューマンエレクトロニクス」である。このコンセプトの内容を高め、商品コンセプトとして具体化していくのが研究所の重要な使命である。

昨年7月「ヒューマンエレクトロニクスシンポジウム'89」を開催した。内外の専門家に集ってもらい、ヒューマンサイエンス・地球環境・量子材料・並列情報処理と光技術・コミュニケーションとネットワーク・マイクロマシーニング・メディカルサイエンス等のテーマについて基調講演とパネルディスカッションを行った。

「ヒューマンエレクトロニクスシンポジウム」は、'90, '91, ……と毎年継続していく予定である。

(リクルート) テッキーヒルズの他の研究所と協同して、学生の会社見学を積極的に受入れて

生産と技術

いる。先輩研究者が自ら、現在研究中のテーマについてフランクに説明することを、原則としている。見学してくれた学生には、好評である。研究者は全員本社が採用し、松下技研へ出向社員として配属される。

(裁量労働) 勤務体系は全員が「フレックス制」に入っている。コアタイムは10時30分から3時15分までである。

この他に「裁量労働制度」がある。仕事場所

は自宅か会社かは本人の自由であり、月32時間の残業手当が自動的に支給される。裁量労働制度に入る社員を、毎月労使で認定をする。従って、研究者は自己の仕事のフェーズにあわせて裁量労働か通常のフレックス勤務かを選択することができる。毎月平均20名程度の研究者が、裁量労働をしている。

以上松下技研の一端をご紹介した。ご理解を賜われれば誠に幸いである。

